



町民文芸

只見短歌会 令和六年二月詠草

ふるさとは雪祭りとふに我は今テレビで眺む大き雪像を
馬場 八智

久々に数人集ひそれぞれが主役の如く声を張り上げ
目黒 富子

浅雪に陽射しあたたか福寿草五輪の花びら輝きて見ゆ
関谷登美子

舞ひ踊る雪が小さな手に溶けて「ないない」と息子は顔しかめをり
立花 奏音

朝日差す窓際に置きし爪とぎに若猫長くのをさばり眠る
新国由紀子

亡き母の命日忘れ元気だよと言ひ訳しつつ仏壇に手合はず
渡部ヨリ子

(出詠順)

只見俳句会 二月定例会

妻の手のいきなりジルバ冬の雷
いつもの医者のいつもの笑顔春隣
修 一

春昼の華やぐ声の古城かな
節分の子らの歓声ありし頃
信

談笑は暖炉を囲む初句会
部活動へたへた帰る寒の雨
都

風雪や一本道を喪の車
ちらほらと少なくなりし年賀状
味代子

学童におやついたただく雪祭り
籠を編む蔓の手さばき春兆す
一 恵

昭和の歌ひとつ聞く間に雪積もり
やれやれと正月四日お粥食う
真理子

日高俊平太 指導

白銀の山遠くながめ終戦祈る
寒む空やからすの群に声をかけ
睦 子

鳴くごとき音なり吹雪ありありと
初旅や朝日橙色放ち
紺 青

早春や小流れ水をあふれしむ
土を踏む土やわらかしあたたかし
礼

長靴や曾孫五人の色違い
地吹雪やころび転びて一年生
一 穂

